

タキイ交配ホウレンソウ 「サマースカイR7」 アール セブン

1 ほ 圃場の準備

①整地は適湿で行う

圃場が乾燥しやすい夏どり栽培では、土壌の適湿を保つことが栽培の安定につながります。土壌表面は乾いていても、深層には水分があり、長く伸びた根から水分を吸収できる状態が理想です。播種後の灌水だけでは深層まで水を浸透させることは難しいため、あらかじめ圃場が適度な水分を持った状態で整地を行うようにしましょう（第1図）。

前作終了後すぐに播種するよりも、圃場が乾燥している場合は直ちに圃場灌水を行い、適湿になってから整地を行います。播種は数日遅れますが、その分作柄は安定するので、ぜひ実践してみてください。

②土壌の保水性向上を図る

夏どり栽培では土壌のよしあしが作柄に大きく影響し、特に保水性と適度な通気性がある土壌が適します。それには日ごろから計画的に良質の堆肥（たいひ）を投入し、有機質をたっぷり含んだ土づくりを行い、団粒構造の形成を促すことが肝要です。

③灌水資材を確認する

夏どり栽培では灌水ムラがそのまま生育ムラに直結するため、播種前に灌水が均一であるか、使用する資材を確認しておきます。目詰まりなどがある場合は掃除しておきましょう。

夏どり栽培のための 管理ポイント



タキイ長沼研究農場
はやし ひろ のぶ
林 宏信

ホウレンソウの夏どり栽培では、高温・乾燥条件を緩和するために、遮光資材の活用や灌水管理を行い、土壌水分と温度をコントロールすることが栽培管理技術の要点となります。

また品種としては、生育が安定した伸長型、生育はややじつくりの株張り型などタイプの異なる品種が存在し、それぞれの品種特性に合った栽培管理が欠かせません。今回は、冷涼地の夏どり栽培に好適する伸長型の品種で、立性かつ作業性が優れる「サマースカイR7」の栽培管理の要点をご説明します。

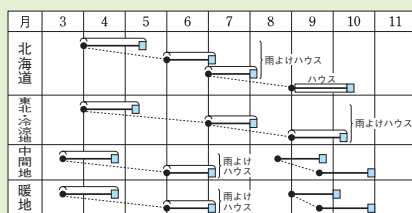
「サマースカイR7」の適作型

①高・冷涼地

- ・ 4月上旬～8月下旬まき→5月上旬～10月上旬どり

②一般地（中間地標準）

- ・ 3月中旬～5月下旬まき→5月上旬～7月上旬どり
- ・ 8月中旬～9月中旬まき→9月中旬～10月下旬どり

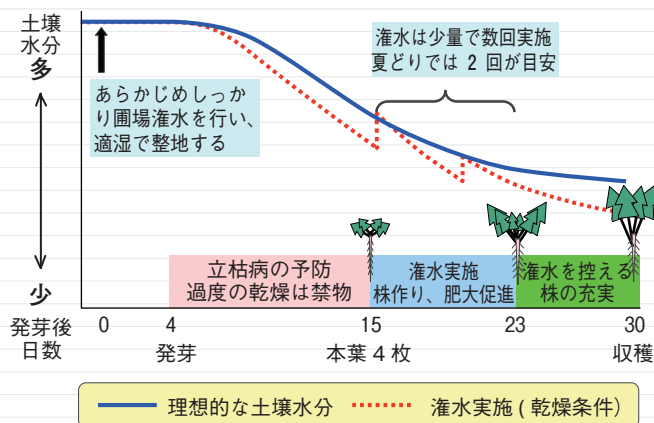


特に高・冷涼地の7～8月まきは、「サマースカイR7」の特長を最も生かせる時期になります。北海道の6月まきは抽苔（ちゅうとう）の危険性が高いため、避けてください。



↑「サマースカイR7」は、べと病レース1～7抵抗性！ 立性で作業性に優れた夏どり種！

第1図 「サマースカイR7」の灌水管理イメージ



← 地表面は乾燥しているが、深層は水分を含み、根から水分を吸収できる状態が理想。

2 播種～発芽期の管理

①発芽するまでは乾かさない

夏どり栽培で発芽を揃えるポイントは、発芽開始までを乾燥させないことです。播種後の灌水は種子がなじむ程度とし、その後は土の表面が乾燥しないよう適宜灌水を行います。

「サマースカイR7」の発芽は安定しており、夏場でも発芽は比較的良好揃います。早ければ播種後4日程度で発芽がほぼ揃うので、それまでは適湿を保ってください。芽を切り出した時点で土壌水分が多すぎると、胚軸が徒長する場合があるため、過湿にはならないよう注意してください。

②高温時は遮光で地温を下げる

地温が30℃を超えるようであれば遮光率80～90%の資材を利用し、地温を下げて播種します(第2図)。資材の除去は発芽がほぼ揃うタイミングを見計らい、夕方に涼しくなってから行いましょう。除去が遅れると苗が軟弱になり、立枯病が発生しやすくなるので注意が必要です。

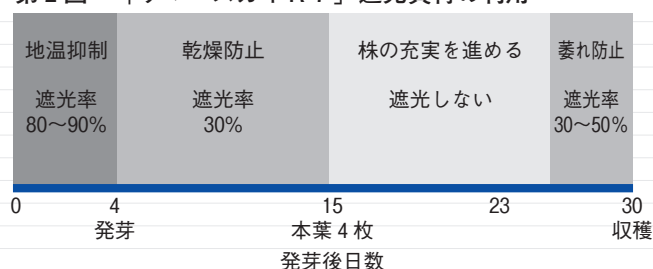
→ 発芽が安定している「サマースカイR7」は、早ければ播種後4日ほどでほぼ発芽が揃う。それまでは乾燥させずに、適湿を保つのがポイント。



③適切な株間で播種をする

「サマースカイR7」では、立性で葉が絡みにくい特長を生かしながら、1株当たりの株張りを高めることが、作業効率と収量向上の両立につながります。そのため播種間隔はやや広めがよく、株間7～8cm、条間15cm程度とするのが最適です。ベルト式の播種機を使用する場合は種子が落ちすぎないように、ベルト穴の調整を忘れずに行ってください。

第2図 「サマースカイR7」遮光資材の利用



3 生育期の 栽培管理

①生育前半は過乾燥に注意する

生育前半は立枯病予防のために灌水を控えるので、圃場が乾燥しやすくなりますが、ハウレンソウが根を伸ばしていく大切な時期でもあります。深くまで伸びた直根は深層からの水分吸収を可能にし、その結果、後半の生育安定につながります。土壌が乾燥すると根の伸長は阻害されるため、乾燥しすぎないように特に注意し、根張りを確保することが最も大切です。

「サマースカイ R 7」の場合は高温・乾燥時の対策として、播種後15日目程度までは遮光率の低い(30%程度)遮光資材をかけて乾燥を防ぎます(54頁第2図参照)。除去する際は必ず、夕方か曇天の涼しい時に行ってください。また、圃場が乾燥してしまった場合は、まだ生育ステージが小さくても、早朝か夕方の涼しい時間にごく少量の灌水を行い、生育を促します。



↑播種後2週間程度、本場3～4枚目が見えたら灌水を開始する。

②生育中期は灌水で生育を促す

「サマースカイ R 7」では、生育中期は収穫に向けて積極的に灌水を行い、株作りを進めることが良作のポイントです。第1図(54頁)のように、播種後2週間程度がたち、本葉4枚目が見え出したら灌水を開始します。ただし、一度に多量の灌水を行うと軟弱生長の原因となるため、少量の灌水を数回に分けて行いましょう。灌水量の目安は2回程度、1回の灌水量は5～10mm程度としますが、圃場条件により適宜調節します。

播種後20日を過ぎると「サマースカイ R 7」は葉幅が出て、葉柄が太くなり、株が一気に仕上がってきます。このタイミングで灌水をしっかり行い、株の肥大を促すことが収量アップの秘訣です。

灌水は早朝か夕方の涼しい時間に行いますが、しっかりと灌水したい場合は夕方の灌水をおすすめします。また、この時期は極力遮光は行わず、株の充実を進めます。圃場の乾き具合をよく観察し、萎れ^{しお}が発生する前に早めの灌水を心掛けましょう。



↑播種後20日目、この時期の灌水が収量アップのポイント。



←
「サマースカイ R 7」の6月まきでは、抽苔の危険性が高くなるので早めの収穫を心掛ける。“生育日数30日越え”がポイントになるので、それまでに収穫を行う。

4 収穫前の栽培管理

① 灌水を抑えて品質を高める

伸長性のよい「サマースカイR7」では、収穫前に灌水を抑えることが株の徒長を抑え、品質を高めることにつながります。

灌水を打ち切るタイミングは、通常なら収穫1週間前ですが、高温・乾燥条件では5日前が目安となります。一方、地下水位が高く、生育が進みやすい圃場や曇天が続くことが予想される場合は、より早めに灌水を打ち切ってください。

② 収穫前の萎れを防ぐ

「サマースカイR7」を含め、伸長性のよい夏どり種は、高温・乾燥による生育遅延が起こりにくい半面、収穫直前の萎れや葉焼けには注意が必要です。最後の灌水後、高温が続いて圃場が乾燥した場合は、早めに薄い遮光資材（遮光率30～50%）をかけてこれら症状を防ぎます（54頁第2図参照）。



↑ 収穫前に灌水を抑えて株の徒長を抑えることが、高品質の「サマースカイR7」を収穫できるコツ。



→ 播種後30日前後で収穫。株元の腐敗がしにくい「サマースカイR7」で収穫・調製も容易に行える。

5 収穫

～株元の腐敗がしにくい「サマースカイR7」～

「サマースカイR7」は、播種後30日前後で収穫となります。伸長性が安定しており、生育遅延が起こりにくいいため生育日数が計算でき、計画的な作付けが可能です。

夏どりでは、出荷後における株元の腐敗の発生が問題となります。これは除去葉の取り忘れや調製時の傷から発生するケースが多く、調製には注意が必要です。この点「サマースカイR7」は除去する本葉1～2枚目が小さく取りやすいこと、葉柄が肉厚かつしなやかなため折れにくいことから、腐敗には比較的強い品種といえます。

6 抽苔対策

～6月まきでは収穫遅れに注意する～

「サマースカイR7」の抽苔性については、6月まきを除き、標準的な栽培方法であれば抽苔の心配はありません（ただし、北海道を除く）。日長が長く、抽苔しやすい6月まきの作型では、生育日数が30日を越えると抽苔の危険性が高くなるため、早めの収穫を心掛けてください。

また、生育が徒長気味になると抽苔の開始は早くなります。そのため、生育期間を通じて低日照が続く場合は、生育中期の灌水は控えてください。